

2023 年度事業計画

2022 年はロシアによるウクライナへの軍事侵攻、それに伴うエネルギー資源の高騰から始まった消費者物価の急激な上昇、異常気象による各地の被害、国政選挙中の元首相の横死、為替相場（円）の乱高下など、まさに VUCA 時代、先行きが不透明で予測不能な社会の渦中にあることを実感させられました。

また、子どもを取り巻く環境についても虐待やいじめ、教育格差、教員・保育者の不足、ヤングケアラー問題など、さまざまな社会問題として取り上げられ、世の中の関心も高まっています。

このような時代の先にある未来社会において子どもたちが自分らしく輝き、たくましく幸せに生きていくには何が必要なのでしょうか？まさに今、教育・保育界に問われている大きな課題の一つといえます。

こうした中、政府は「こどもまんなか社会」の実現を提唱し、その司令塔としてこども家庭庁を創設、本格的に取り組むことを決めました。さらに出生者数が年間 80 万人を切ったことをうけ、異次元の少子化対策にも乗り出します。財団においてもこのような課題認識を踏まえて、財団が唱える「科学する心を育てる」保育と「科学が好きな子どもを育てる」教育の原点に立ち返りながら、改めて未来志向にたった事業計画の策定に取り組みました。

折しもこの 3 年間財団活動に大きなマイナス影響を与えたコロナ禍も感染法上の扱いを 5 類になることが決定しました。活動に対するさまざまな制約が開放され、事業再開と拡充に向けた契機となっています。

また、前期に経営課題として表面化した収支相償問題についても改善に向けた施策を盛り込み、健全な運営を維持しながら、教育・保育界に貢献できる活動をダイナミックに推進していきます。

【公1】 科学教育を中心とし、乳幼児と児童生徒の豊かな人間性の確立と創造性の育成を目指す事業

教育実践論文募集をベースとした本事業は、当財団の主幹事業であり、論文主題に沿った教育・保育実践論文（学校・園対象）と教育実践計画（学校教員対象）を募集し、優れたものを選定し、その学校・園、教員個人に対し、助成を行うものです。また、助成するにとどまらず、その実践をベストプラクティスとして、他校・他園に紹介し、ともに研鑽していくことを目的としています。

1. 乳幼児教育(ソニー幼児教育支援プログラム)

本プログラムは幼稚園・保育所・こども園を対象に、主題「科学する心を育てる」の保育実践論文を募るもので、20 周年を迎えた今期は 162 園から応募をいただき、過去最高応募数を更新しました。とくに初応募となる園が増加しており、関心を寄せていただける園の拡がりを感じます。また、論述内容も子どもたちが自ら遊びを作り出し、新規性や独創性ある多様な遊びの中で「科学の本質」に迫る体験をしている実践が数多くみられるようになりました。そこには保育者による子どもたちの体験を豊かにするためのさまざまな環境や援助の工夫があり、それは本プログラム 20 年にわたる研究の積み重ねとも考えられ、次の 20 年に向かってさらに研究を深めていきます。

(1) 論文の質的向上につながる実践事例の学び合う場の提供

応募論文の中から優れた実践をベストプラクティスとして他園に共有することで、さらなる質的向上を図るとともに、広報周知の場としても活用し、普及につなげる施策を提供していきます。最優秀受賞 2 園による実践研究発表会は長らくコロナ禍により、集会方式による開催を自粛しておりましたが、来期は公開保育も含め、保育者や関係者が一堂に集まり、交流しながら、ともに学びを深めるものを目指します。すでに今期最優秀園を受賞した「白梅学園大学附属幼稚園（東京都）」と「奈良市立伏見こども園（奈良県）」とはその方向性で検討を開始いただいています。また、優秀受賞園においても近隣園を巻き込んだ発表会を計画しており、それぞれ地域の特色を生かした研究会になる予定です。さらに来期はこれらの発表会に希望する保育者に対し、財団が費用負担し、

現地に派遣して学んでもらう制度「他園に学ぶプログラム」を再開させます。

(2) 新規性や独創性ある実践のさらなる発掘(審査力の向上)

昨今、園を取り巻く環境の変化や ICT 活用などにより、学びの源となる子どもたちの遊びは多様化が進んでいます。また、子ども主体性を尊重する保育が浸透してきたことで、大人には想像つかない独創的な遊びへの発展も見られるようになりました。従来のオーソドックスな遊びからの学びに加え、こうした今までにない遊びの中からも新規性や独創性ある「科学する心を育てる」保育も見出していく必要があります。そのため、来期は審査力の向上を図り、そうした実践を論文の中から発掘できる力を備えていきます。すでに今期から外部の有識者を迎え、査読体制を再構築していますが、査読員間で改めて評価視点や基準について議論し、レベルの高い審査体制を整えていきます。とくに 0~2 歳児の実践評価は喫緊の課題として取り組んでいきます。

2. 子ども科学教育(ソニー科学教育プログラム)

本プログラムは小・中学校を対象とした「教育実践論文」と小・中学校の教員個人を対象にした「教育実践計画」の二つの論文部門で構成されています。教育実践論文は「科学が好きな子どもを育てる」を主題とし、今期から全教科を対象に変更し、教育(授業)の実践に関する論文を募集、優れた取り組みを進める学校に対して助成を行っています。また、教育実践計画は全教科を対象に「将来、子どもたちが必要とされる資質・能力の育成」を設定し、その育成計画を募るものです。入選者にはその実践に向けた助成を用意しています。

(1) 教育実践論文 応募数増加に向けた施策の展開

■ 広報活動の強化

ここ数年、応募数の減少傾向が続いておりますが、今期は 101 校の応募に留まり、前期から大幅な減少となりました。書き手となる若手教員の減少、さらに教員の多忙さが論文応募の大きな負担となっておりますが、財団としても周知努力が十分ではなかったかとの課題認識をしています。来期は意識の高い教員コミュニティの発掘を進めるとともに、論文説明会など積極的に財団事業の周知と理解を深めるイベント型の広報活動を計画しています。また、文科省や教育委員会などとの連携も図りながら、財団活動の理念と意義を理解いただき、教育界を巻き込んで事業普及に努めます。

■ 魅力訴求による応募意欲の向上

今期から応募の負荷を下げることを目的に論文記述数の上限を引き下げる募集要項の見直しを行いました。来期はさらに応募のモチベーションをあげる施策を進めていきます。具体的には助成内容に従来の助成品目に加えて財団主催の自己啓発イベントへ招待することや、とくにユニークな実践に対しておくる「特別賞」を設けるなど入選賞の新設といったものを検討しています。

(2) 教育実践計画 さらなる認知度アップによる応募数の増加

今期 2 度目の募集となった教育実践計画には 33 名の先生方から応募をいただきました。前期より応募数は減少したものの、内容的には前期より教科の拡がりがあり、資質や能力も多岐にわたるものが提案され、ユニークな実践計画が寄せられました。教育実践論文と同期して周知広報活動に努め、この論文部門を大切に育てていきたいと考えています。

(3) 入選校のベストプラクティスをより広く共有できる仕組みづくり

■ より教員間の交流が図れる「子ども科学教育研究 全国大会」の企画運営

最優秀賞校(小学校 1 校、中学校 1 校)による実践事例を発表いただく全国大会ですが、今期は感染予

防対策を徹底したうえで、2校とも公開授業を含め、集会方式により開催いたしました。

大きなトラブルもなく、集会方式ならではの教員間の深い交流と学びの質の高さを感じるものでした。来期はコロナ禍以前の規模を想定、教員間のつながりを強くし、さらに深いコミュニケーションができるものにしていきます。

すでに開催予定校である「横浜市立白幡小学校（神奈川県）」と「富士見町立富士見中学校（長野県）」と検討を始めています。

3. 広報・IT 関連

(1) 広報関連 事業の魅力を発信し、認知度アップにつなげるウェブサイトのリニューアル

ここ数年を事業の見直しを行ったため、現在のウェブサイトとマッチしていないところがあり、全面リニューアルを行います。リニューアルにあたっては財団ウェブサイトを各事業の告知活動の受け皿（情報提供サイト）と位置づけ、訪れた人が検索しやすいシンプルな構成とし、素早く事業の魅力や参画のメリットを訴求し、参加へのアクションにつながるコンテンツや見せ方を工夫したものに予定。財団内に全事業を横断したウェブサイト・リニューアル・プロジェクトを発足し、具体的な検討に入っています。

(2) IT関連 論文管理システムのアップグレード

今期、教育と保育双方の論文事業について応募受付オペレーションを統合し、システム化することで効率アップを図りました。来期はさらに踏み込んで、応募受付から審査結果の連絡や助成金・贈呈品の確認など応募校・園とのやりとりも可能なものとし、一連のプロセスを網羅し、ミスなく、スピーディーに対応できるものにアップグレードします。さらに効率を向上させ、応募校・園へのサービス向上につながることを期待しています。

【公2】 科学教育を通じ、豊かな人間性確立と創造性の育成を目指す児童生徒対象の体験活動事業

この事業は子どもたちに内部にある「科学する心」を引き出し、大きく発揮できる体験を提供することで、「科学する心」の育ちにつなげていこうとするものです。現在、「科学の泉－子ども夢教室」と「ソニーものづくり教室」の2つの事業によって構成しています。

1. 科学の泉－子ども夢教室

「科学の泉－子ども夢教室」は、『自然に学ぶ』をテーマに、ノーベル化学賞を受賞された白川英樹博士が塾長として5泊6日で自然豊かな場所で行う探求教室です。この3年間、コロナ禍の影響で開催は中止してきましたが、来期も感染防止策は緩和されつつあるものの、子どもたちによる生活を前提とした本教室の開催は時期尚早と判断し、中止することにいたしました。また、毎年3月に開催している卒業生との交流会も集会方式は見送りましたが、今期は初のオンライン開催を予定しています。引き続き、卒業生の縦のつながりを支援していきます。

2. ソニーものづくり教室

前期、公益財団法人の財務3原則の一つである収支相償が未達になりましたが、主たる原因としてはコロナ禍の影響を受けた「ものづくり教室」の開催が縮小され、「ものづくり基金」の収益を上回る支出が発生しなかったことによるものです。来期はコロナ禍の収束を見越し、収支相償改善の観点からも「ものづくり教室」の開催を積極的に展開します。

(1) ソニー事業所主催の「ものづくり教室」の再活性化

従来、「ものづくり教室」は主としてソニーの事業所（工場）が地域貢献活動の一環として開催を担ってきましたが、この3年間はコロナ禍の影響を受け、開催の自粛（縮小）を余儀なくせざるえない状況になっていました。

しかしながら、今年5月には新型コロナウイルス感染症の感染法上の5類への移行が決まり、その制約の解除が期待されることを機に改めて「ものづくり教室」の再開と拡大を働きかけていきます。コロナ禍以前は年間約50回の開催があったことから、来期は年間30回程度の回復を目指し、ご協力をお願いしていきます。

(2)「ものづくり教室」開催主体者の発掘と確保

「ものづくり教室」の開催いただける組織・団体をソニーグループ外にも広げ、その発掘と確保を図ります。例えば全国の科学館、公民館など地域住民とのイベントを開催している組織・団体や発明協会、ボーイスカウトなどを青少年・女子の健全な成長を願う組織・団体に対し積極的にアプローチしていきます。すでに品川区、厚木市、大分市などに候補が挙がっており、今後具体化していきます。

(3)ソニーグループ子会社との連携による安定的な運営体制の確立

「ものづくり教室」の開催主体者を拡大するにあわせ、「ものづくり教室」の実績あるソニー・太陽（大分県）とソニー希望・光（東京都）と提携し、講師育成と教室運営を支える体制も確立していきます。講師育成ではソニーグループのエンジニアに「ものづくり教室」の講師ボランティアを募り、育成プログラムを提供し、教室の開催にあわせ派遣します。またエンジニア自身が独自に教室開催することも推奨し、支援していきます。教室運営については募集から当日の運営までのノウハウを開催主体に提供し、立ち上げをサポートしていく予定です。

(4)「ものづくり教室」の新コンテンツ開発

ものづくり教室事業を継続的に拡充するために、ソニー・太陽と新しいコンテンツを共同開発し、バラエティに富んだ内容にすることでさまざまなニーズに対応できるようにして魅力を高めていきます。コンテンツの内容も単に組み立てて完成させるだけでなく、科学の原理や法則を楽しく学びながら、「科学する心」の醸成にもつながるようなコンテンツの開発を目指します。

(5)学校教育(授業)への展開

「ものづくり教室」を学校教育の一環として取り入れる試みを開始します。ものづくりは理科の授業で学んだ原理・法則の活用であり、日常生活への応用としてさらに学びを深めることができますが、加えて、失敗から学びや試行錯誤を繰り返す、仲間と協力して完成にたどりつくなどPBL(Project Based Learning)の学習要素を含んだ学びの場となりえます。来期は財団と理念を共有する教員組織「ソニー科学教育研究会(SSTA)」と連携し、オリジナルプログラムを開発、トライアルとして複数の小・中学校と導入していきます。

(6)エンジニア体験プログラムの拡充

高校生向けの「ものづくり教室」であるエンジニア体験プログラムは、自律型エンタテインメントロボット“aibo”の動作アプリケーションプログラムをソニーグループのエンジニアとともに開発するものですが、毎回好評をいただいております。また、来期は対象を広げ、小学生を対象としたプログラムも導入いたします。すでに小学校には授業としてプログラミング教育が導入されていますが、それを念頭に1週間をかけて“aibo”と慣れ親しみながらエンジニアと一緒に動作アプリケーションを開発するものを予定しています。より多くの子どもたちに、実際の製品を通じたものづくりを体験してもらう機会を増やしていきます。

【公3】 科学教育を中心とした教員の質的向上を目指す研究・研修等諸活動を支援する事業

財団の目指す『科学する心』をはぐくみ、『科学が好きな子どもを育てる』には、現場を預かる先生や保育者の方々が、これらの理念をしっかりと理解いただき、効果ある教育・保育をいかに実践していただくが重要になります。

財団の理念に共感し、ともに明日の教育・保育を考え、変革していく教員・保育者の発掘し、その支援を進めます。

1. 乳幼児教育

(1) 保育者ネットワーク(会員組織)の拡充

2年前に発足させた保育者の個人会員組織(乳幼児のための「科学する心」ネットワーク)は着実に会員数が増加し、現在は850名を超え、この1年間で200名近くの入会をいただきました。このネットワークを生かし、財団と保育者、保育者間のつながりを深め、「科学する心を育てる保育」を深掘りしていく母体としていきます。

■会員によるサークル研究会活動の奨励

今期、ネットワーク会員による自主的な研究会(サークル)に対し、助成する制度を導入しました。研究会リーダーを公募したところ、9人のリーダーを選出し、それぞれ「科学する心を育てる」に沿ったテーマを設定したサークルを立ち上げ、活動を開始しています。来期はその活動成果の発表会イベントを開催し、会員間で相互に学び合い、交流できる場を用意し、会員が自ら学びを深める環境を整備していきます。

■保育者育成団体と提携した「保育実践ゼミナール」の継続開催

また今期は保育者の教育研修団体として評価の高い「ぐうたら村」と提携し、センス・オブ・ワンダーを体感し、「科学する心」の本質を考え、保育に活かすことを目的とした研修会を立ち上げました。今までとは違う視点で保育を考えるきっかけになったとの声や保育の志を共有する仲間ができて励みになったなどの感想をいただいています。

来期は現在のプログラムに改良を加えるとともに、第1期生と交流する場を設けて、仲間を増やし、さまざまな視点から学びを深めるものを計画しています。

(2) 幼保小連携プロジェクト発足

財団ならではの活動として「幼保小連携プロジェクト」を立ち上げ、現役の小学校の教員3名と園の保育者3名をメンバーに、論文審査委員で学習院大学教授の秋田喜代美先生による監修のもと、幼保小研究で第一人者の活躍の横浜市立恩田小学校の寶來生志子先生のご助言をいただきながら、武蔵野大学の箕輪潤子先生のコーディネートで、園から学校へシームレスな学びをつなげていくにはどうすべきかの研究を重ねています。財団論文の上位に入選した教育・保育の実践論文を相互に読み合い、共通する教育・保育の神髄や要諦を定期的に話し合っています。来期はさらに研究を重ね、外部への発信も視野に進めていきます。

2. 子ども科学教育

(1) トップリーダー研修会を財団主催研修として本格導入

昨年12月、トライアルで導入した教育界の変革リーダー育成を目指す「第1回トップリーダー研修会」は無事終了し、内外から教員の視野を広め、視点を高める今までにない教員研修との評価を得ることができました。来期は財団主催研修として広く参加者を公募して本格導入いたします。研修生はトライアルから倍増の24名とし、期間は2023年6月～2024年8月までの14ヵ月間とし、研究課題(「2050年に子どもたちが活躍しているために、あなたたちは何をしますか?」)に取り組んでもらう予定です。さまざまな背景をもった多様な参加者で切磋琢磨する研修会を目指します。

(2) SSTAとの連携による授業研究の向上

SSTAはソニー教育財団の理念に賛同し、実現のために実践を推進する先生方の任意団体で、全国に47支部、約1,400名の会員を擁しています。自治体の枠を超えて全国の教員がつながり、教育実践論文の主題である「科学が好きな子どもを育てる」を共通のテーマにした授業研究や研修会の開催など独自の活動をしています。前期、SSTAでは研修体系を見直し、授業研究の最高峰を目指す「エリア研修会」を立ち上げました。この研修

は全国を6つのエリアに分け、複数の支部が合同で、科学的な思考による学びを深め、次代の理科教育を創造する」ことを研究するもので、今期にその初回研修会が各エリアで開催され、エリアの特色にあわせた授業研究を行い、来期以降も継続して研究を進める予定です。子どもたちの将来に必要とされる資質・能力の養成につながることを期待され、財団としても継続して支援していきます。

以 上